

長屋のくらしと道具 ⑤

江戸庶民の衣類

江東区深川江戸資料館



式亭三馬『浮世床』(文化11年 1814) 東京都江戸東京博物館蔵
髪結いの仕事風景。室内ですが足元が汚れているためか、草履を履いています。

今年度は、江戸庶民の生活に関係するものをテーマとしてきました。今号は、日々の暮らしの中で着ていた衣類(着物)を取り上げます。場所や行事によって、衣類を着替えていた将軍や大名たちとは違い、庶民はどんな衣類を着ていたのでしょうか。

江戸時代は、今と違いすべての物を大切に、再生・活用という、徹底したリサイクルの発達した社会でした。特に、着る物(布)などは大事にして、大人着用物→子ども着用物→(オシメ)→雑巾→火に焼べる(炊付け)→灰の利用(洗濯・染物・肥料など)と、再利用していました。また、リサイクルに伴い種々な職業・商売(物売り)ができ、職種に合わせた仕事着も生まれました。

小袖・帯

江戸時代の庶民の衣服は、現代の「着物」の原型になる「小袖」でした。小袖とは、袖口を小さく縫い詰

めて小型の袖にしたものでこの名がついています。古くは、公家や貴族の肌着であったものが、肌着と表着の間に着る間着となり、さらに表着となり定着しました。

女性用は、多種多様な色・柄・文様が生まれ、時代ごとにデザインやスタイルが変化していきました。大まかに分類すると、次の様になります。

◎前期(慶長～元禄頃・～1704) …素材は麻や木綿が中心で、文様も色彩も派手で、人目を引く大柄が好まれました。桃山時代(16世紀後半)の整然とした文様構成から動的で濃密な慶長小袖へ、よりダイナミックで豪快な寛文小袖へ、そして装飾的でありながらやや繊細な元禄小袖へと変遷していきました。尾形光琳が描いたことで有名な「冬木小袖」などの描繪小袖、宮崎友禅が考案した友禅染での友禅小袖などもこの頃から出現し始めました。

◎中期(宝永～安永頃・～1781) …人目を引くものから、繊細華麗なものが好まれました。この頃は、徐々に「帯」にポイントが置かれるようになり、帯から上と下(裾)に分けて別々に模様をつける割模様小袖

や、両袖にかかるほどの裾模様のある腰高模様小袖が流行しました。また、奢侈（贅沢）禁止令の発布により、裏へ模様をつける裏模様小袖も出てきました。

◎後期（天明～慶応頃・～1868）…目に付く派手さを抑さえ、模様が裾から裏へ移行するに従い、細かい部分や隠れた所に贅沢をするようになりました。表側はほとんど無地であっても、裏側は繊細な模様がある小袖の流行は、禁止令だけでなく江戸の人々の美意識の変化にもよるものでした。目立たないところに贅を尽くす、いわゆる「粋」の世界です。通人たちは、この意識を「底至」と呼び、当時の版本（洒落本）等にはこの「江戸語」がしばしば見受けられます。

この他模様では、中・後期に縞模様が流行しました。このことは、当時の浮世絵を見ればよくわかります。また、形態も変化し、筒型の袖に袂が付くようになり、丸味も長さも変化し、華やかになりました。

小袖は前を重ね合わせる着方をします。合わせた前面を押さえるための帯が必要となり、小袖に帯は不可欠となりました。そして、小袖の変化に合わせて、帯も急速に発達しました。男性用は実用性が重視され、それほど変化はありませんでしたが、女性用は、幅や長さが大きく変化発達しました。最初は、紐状の帯でしたが、後には胴いっぱい幅広帯になりました。寛文頃（1661～）は2寸5分～3寸（9.5～11.5cm）だったのが、延宝頃（1673～）は5～6寸（19～23cm）、元禄～享保頃（1688～）は8～9寸（30～34cm）、文化頃（1804～）には1尺5分（40cm）にもなりました。長さも、6尺5寸～7尺（2.5～2.7m）から1丈2～3尺余り（4.5～4.9m）と変化がありましたが、大体は8尺（3m）ほどでした。

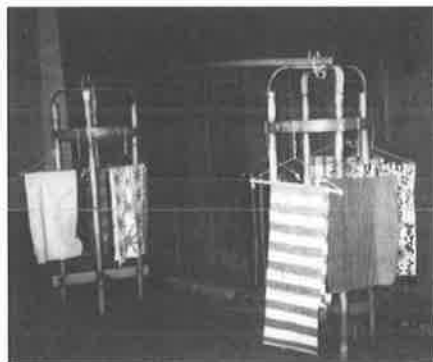
※布地用の尺は鯨尺を使います。今の単位にすると、1尺は約38cmです。

結び目の位置は、前・後・わき結び、いろいろでしたが、幅広帯の発達により後ろ結びが定着しました。結び方も、結び目や結んだ余りの使い方でも種多様の形が創作されました。『都風俗化粧伝』[文化10年（1813）刊・佐山半七丸著、速水春暁斎画]に、さまざまな結び方が紹介されています。

小袖と帯は、庶民の代表的な衣類として、時代とともに変化・発達していきました。



松次郎の部屋 腹掛け・半纏・脚絆などが吊るしてあります。



古裂（継ぎ接ぎ用古布）掛け これを担いで売り歩きます。

仕事着

江戸には色々な職業があり、仕事に合わせた機能的な衣類がありました。そこで展示室の長屋を覗いてみましょう。深川に係わりのある仕事をしている人々が住んでいます。この中で、船宿で働く船頭（松次郎）・貝のむきみを売る棒手振の行商人（政助）の家には、特徴ある仕事着（腹掛け・脚半・半纏など）が中に吊るされたり洗濯物として干してあります。この他、職人の仕事着として股引があります。股引は、最初は川並（深川の筏師）が仕事着として穿いていたもので、細身に作られていました。座職の職人は、細身では所作が不自由なため、ゆるやかな股引でした。また、股引の一種であるパッチも穿かれ、腹掛け・股引類・半纏が職人の仕事着であり日常着でした。

衣類の種類

羽織…小袖の上に着る衣服として定着したのは、江戸時代に入ってからです。当初は裕福な人の贅沢品でしたが、次第に庶民の間に愛用されるようになりました。そして、小袖の丈と同じ程の「長羽織」、腰にかかる程度の「短か羽織」、袖のない「袖無し羽織」等いろいろ

なスタイルのものがありませんでしたが、元文の頃（1736～）より女性の間にも流行し、羽織芸者と呼ばれる深川の芸者の出現もこの頃です。

単衣…下に肌襦袢を着るのが一般的です。

浴衣…元来は麻の白無地の単衣で、沐浴の際に着て湯に入っていました。後に浴後の衣料となりました。浴衣は、素肌に着るもので街着にはなりませんでしたが、祭礼の衣裳や夕方の散歩着、夏の家庭内での日常着として着られました。また、雨着や道中の塵除けとしても利用されました。

半纏…印半纏は火事場以外にも、大工や左官は日常着として着用しました。庶民は防寒用としても着用しています。

法被…元来は火事場装束です。記号や模様を白抜きに染め出すのが一般的でした。

丹前…襦袢ともいい、防寒用として重ね着をします。柄は縞ものが一般的で、鳶や職人は街着としても愛用していました。『守貞謄稿』（嘉永6年（1853）刊）には、「丹前と言うことは江戸に始まりて、今江戸に廃し、かえって京坂の服名に存す」と説明があり、京坂は丹前、江戸では襦袢と呼んでいると紹介しています。